年末回顧 2022 ⑩

民意が交錯し紆余曲折

再選定、納得の着地点を

倉吉市の「至誠小」巡り紛糾

「賛成多数であります。よって議案第84号は原案の通り可決されました」

倉吉市の小学校の校名を巡る問題は市民による直接請求を引き起こし、紆余曲折の末、22日の12月定例市議会最終日、校名を再選定することが決まった。閉会を告げるブザー音の直後、議場は傍聴者の拍手に包まれた。開校まであと4カ月。校名問題はここから最後のヤマ場を迎える。

■異論■

問題の発端となったのは9月議会の一般質問だった。公募結果が「打吹」が最多150件、「至誠」1件だったと聞き、耳を疑った。さらにこの2案に絞って行った学校統合準備委員会内の多数決に中立性が求められる委員長が参加し、同数だったため最後は委員長判断で「至誠」と決めた事が明かされ、率直におかしくないかと感じた。

市民からは異論が噴出。しかし、開校準備が遅れるとして条例案が可決成立されると、その怒りは市議会にも向けられ、「非常識なルールで校名が決められた」として条例の改廃を求める直接請求のための署名運動が起こった。

■ルール■

結果、4815筆の有効署名が集まり、広田一恭市長は賛成意見を付けて条例廃止案を上程。先の通り可決された。ただ、選定方法については「適法正当」としていた。

適法正当であるならば、この問題の原因は何だったのか。確かにルールに問題はない。校名を応募数で決めないことは公募要件に明記されており、委員長が最終判断するという多数決のルールも統合準備委の設置要綱にある。

今となっては考える意味はないかもしれないが、校名だけは多数決ではなく、あくまで話し合いで合意形成するべきだったのではないか。たとえ時間がかかっても、十分に議論がなされていれば、「打吹」よりも「至誠」が、ふさわしいという、多くの人を納得させられる「答え」が見つかったのかもしれない。

この問題では、多くの民意が交錯した。校区の住民代表で組織された統合準備委の決定。条例案を議決する議員の議決。直接請求のために集まった署名。どの民意も、全ては新しい学校に通う子どもたちを思っての事だった。回り道はしたが、これまでの議論を無駄にしないよう一人でも多くの市民が納得できる着地点を見いだしてほしい。

（本高屋修）

（おわり）

統合小学校の校名を「至誠小」とする条例の廃止案に賛成し、起立する議員＝22日、倉吉市議会議場

ミニクリップ

至誠小問題 倉吉市の小学校再編により、成徳、灘手小の2校を統合して2023年4月に開校する新小学校の校名が6月、公募案の中から「至誠」に決定。しかし、9月定例市議会で応募件数が地名由来の「打吹」150件、「至誠」1件だった事が明らかになると、市民から異論が噴出。広田一恭市長が異例の条例案の取り下げ請求を行ったが、市議会は開校準備が遅れるとしてこれを棄却、可決した。市民団体「新校名の再考を求める住民直接請求の会」が5千近い署名を集め、条例案廃止と校名再考を求めて市に直接請求。広田市長は廃止案に賛成し、市議会も可決した。